第208話　俳額⑥　幕末の俳諧　その2　中山町歴史散策

天保時代は、相次いで冷害被害に見舞われて、文芸に親しむ余裕などあろう筈もないのに、各地に俳人が育ち、盛んに句会が催されています。作句の風も、発句を中心に、七七の下句を添えない5・7・5字の作りやすい形が定着したことも、一層大衆に親しまれた理由であると考えられます。

天保6年（1835年）、この年、俳諧出句を手書きで示すほか、木版摺ものが普及し、広く俳人の作品が頒布され、埋もれた俳人が一斉に日の目をみることになりました。すなわち、俳諧の常連には、二川（寒河江）、臣英（長崎）、二丘（漆山）、稲州（吉川）、吟霞（楯岡）、川丈（山寺）、石蘭亭楓二（谷地　槙風二）、宥勝（慈恩寺淋山）、岩月、野泉、宜隙、松月（長崎）らの名が台頭し、多くの句会に登場してくるようになります。

こうした俳人の句は、さまざまな句集に入集され、全国的な交流の中で、天保14年（1843年）には、吉川稲州に京都二条家御連中の免許御朱印状が贈られ、弘化2年（1845年）、長崎の秋葉弥右衛門に「岩月」の俳号と蕉風伝授血脈が贈られています（長崎秋葉富貴子氏蔵）。

天保15年（1844年）、牛頭天王俳額奉納句会では、広く近隣の俳人から句を募っているが、7人の女性俳人が加わっています。大方は、商家の主婦であろうか、紅花を詠んだ句が多いことも、長崎という土地柄を思わせます。既に女性の間にも句作が行われた証左で、長崎界隈若しくは長崎の句会に集まった女流俳人は次のとおりです。

長崎：三浦女、林女（里ん女）、婦女、千代、さの女、君枝、ひさ女
島：藤女

近郷の俳人には、文章に秀でた人も多く、皿沼の和生、長崎の其松も筆が立ち、天保15年元旦の其松の筆は見事です。

「明立今朝の心嬉しくは津鶴の声にむく起きて、いざと戸を開けは四海の波静かに風ふく和らげ、雪原に風雅の心をよせ、側なる硯を引きよせ、少々筆に戯れた」

ひらく年を先づ吉日とはつ暦　　其松

と簡潔ながら、口調もよく田舎俳人ながら文章もなかなかのものです。

※引用　中山町史　中巻　第10章第3節　文芸と美術工芸

私たち地域おこし協力隊です！ No.74

ごきげんよう～。地域おこし協力隊に着任して1年が経ちました。

四季を通して中山町はもちろん山形県、東北地方の事を色々と知りました。

そして、『旧〇（まる）っと』を仮の居場所としてお借りすることができて、多くの中山町の皆さんと交流ができています。町内に知り合いが増えたことで日常が更に楽しく過ごせるようになりました。

おかげさまで、そのような皆さんから食文化などの情報をいただきながら商品開発を進めています。

すもものシーズンが終わって、今はアスリートに向けて米を使用した商品開発に重点をおいています。美味しい米は作るのに『八十八の手間』をかけるそうです。『米』の漢字からこの手間数が読み取れます。

米の栄養素分類は炭水化物で『身体のエネルギーのもとになる』ものです。一日の始まりにはぜひ『米飯』を食べて欲しいと思います。具をたくさん入れたおにぎりも良いですね。米でパワーチャージし、脳みそにたくさんの栄養を送ってください。米を食べると力が湧く～！だから私はパフォーマンス向上を期待しています。手掛けた商品を通し、瑞穂の国の宝物として『米』文化を次世代に伝え残していきたいと考えています。中山町産のお米はマジで美味し～い♡

●協力隊への問い合わせ先●　阿部 ☎662-4271（総合政策課）

阿部美恵子
出身地：栃木県鹿沼市
趣　味：高校野球観戦

米加工試作の様子